

テレビドラマ「ER」に見る アメリカ社会と医療の現代史

渡部 幹夫

1994年アメリカNBCが放送を開始したテレビドラマ「ER」は第13シリーズまで連続して放送が続いており、2008年に至っている。1シリーズが22から23作品であり290の作品がすでに放送されている。1995年からNHK衛星第2放送から放送された日本語版も第12シリーズまで放送を終了している。これからも作品の制作と放送は続く予定である。第1作からすべての作品の医学監修を引き受けて現在に至っているがこのテレビドラマと、その描くアメリカの医療の現場について現代史と医療史の考察を加えてみた。

このドラマはハーバード大学医学部を卒業した医師であり、多作な作家であるマイケル・クライトンの原作によるドラマとされているが、シナリオライターは数人おりクライトンが指揮をとっているということであろう。初期の作品はアメリカの優良なテレビドラマに与えられるエミー賞を独占的に受賞している。アメリカでの最高視聴率は45%に達したと言われている。日本語の吹き替えにより放送された作品も人気が高く、日本でも少なからぬER現象を引き起こした。日本語では「緊急救命室」として放送されたが、救急医療の仕組みの異なる日本に北米型ERの概念をひろげた意味は大きい。ERの言葉が一般化したのはこの後のことである。

このドラマの放送されている現代は冷戦構造が崩壊後、世界の政治状況がアメリカの一極を中心にまわりだした時代にも関わらず、平和な地球を実現できないでいる。ドラマ「ER」は激動し平和とはいえない現代を、忙しく、問題が多く、騒々しい、シカゴのクックカウンティ・ホスピタルの救急室の現場をかりて、そこの人間模様と共に、淡々と日常的に描いている。この間にアメリカは

アトランタ・オリンピックを開催し、NATOの Kosovo爆撃を主導し2001年の9・11のテロを受け、イラク戦争を開始した。そして、その混乱の中で大統領選挙の年を迎えている。経済的な繁栄もサブプライム問題をきっかけとして危機に瀕している。

世界中で人気の高いドラマとして放送されている「ER」は日本でも初期の熱気は冷めたようだが、確実な数の視聴者をとらえて離さないようである。この間の日本の現代史もまた、災害と災難に見舞われた年の連続である。

このような激動の時代にこの医療ドラマERが異常に長いシリーズとして続いていることは一つの驚くべき現象であろう。このドラマの長寿である理由を次のように考える。

1. ドラマは政治や経済の問題を正面からは全く取り上げていない。
2. 社会史を出演するキャストの個人史として描いている。
3. 医療・福祉・保険・病院などの問題意識はあるが、それをキャストの参入や退出、そして、せりふの中でスマートに触れているのみである。

結論として言えることはエピソードのリアリティをつなぎ合わせるにより、エンターテインメントとしての面白さを維持し続けているということであろう。医療の現実とはやや隔たったものとなっていることが、制作が続けられ放送が続いている理由でなからうか。エピソードへの目配りは、アメリカにとどまらず世界的な規模でされている。医療の現場、アメリカ社会、そして世界中に解決のできない問題が山積しているのが現実であり、それをキャストに体現させてドラマとして

提供している。結論はなく視聴者に問題をなげかけているだけのところが多く、視聴者を惹きつけ続けている理由ではあるまいか。

ドラマを学術の対象として取り上げることはメディア学としても難しいことであるが、このドラマについては1996年 *New England Journal of Medicine* (Vol. 334 No. 24) に *Cardiopulmonary Resuscitation on Television — Miracles and Misinformation* として取り上げた論文が載った。それによれば「ER」を含む医療ドラマの中のCPR(心肺蘇生術)は成功率が高すぎ、医療の知識をドラマから得る視聴者にCPRに対する、過大な期待を持たせることが問題だとしている。医療者にはドラマであっても医療の現実を正確に描かせるようにする努力が必要であるとしているが、この論文からその後多くの議論が起こった。また1998年 *Journal of American Medical Association* (Vol. 280 No. 2) は *The Role of the Television Drama ER in Medical Student Life: Entertainment or Socialization* という論説を載せている。医学生が熱中し、教科書からよりも多くのことを学んでいるというドラマと、臨床の現場で学ぶ現実のねじれに対して、学生はどのように職業としての医療人の社会性を身につけてゆくかを論じている。テレビドラマというものの持つメディアとしての大きさと医療そのものの持つ複雑性に対する内省とも読める興味深く難しい論説である。

テレビドラマがこのような形で医学界に取り上げられることは稀有なことに思われる。現

実のアメリカ医療は世界で最も高い医療費を費やし、国民の15%を超える医療保険の無保険者を抱える国である。ERは保険の有無に関係なしに初期治療を提供している。そのコストを病院はコストシフトとして保険請求の中に潜り込ませているという。

高度の医療を持つ豊かなアメリカに国外から患者がやってくることはめずらしいことではなく、ERの初期治療を受ける目的の貧しい国外からの入国者もいるとされている。医療にかかわるスタッフの出自もまた多様である。しかし、人・物・金がアメリカに集まってきていた時代に始まったドラマは、今、少しく変化してきているように感じられる。アメリカはじめ先進諸国の医療費の高さは、*Medical Tourism*(医療旅行)として、安く高度な医療を廉価で提供する国に、賢い患者を流失させてきつつあるという。アメリカの懐の深さは、多くの若者をひきつけると共に、厳しい医学教育により育てた先端医療を担う多くの医療者を世界中に送り出してきた。世界が一体化する中で、文化的な壁を容易に越える技術は世界中に広がるであろう。それと共に、広がる格差は、被医療者としての患者の輸出入をもたらし始めていくという話にはうなずけるものがある。ドラマERの描くアメリカの医療現場のエピソードは事実であるものが多いといわれるが13年間にわたるドラマを通観しての、監修者としての現在の感想はそのようなものである。

(平成20年3月例会)

新刊の医家肖像集 (杏雨書屋)

天野陽介, 町泉寿郎, 小曾戸洋

2008年6月、武田科学振興財団杏雨書屋は『杏雨書屋所蔵医家肖像集』を刊行した。この書は杏雨書屋開設30周年の記念事業の一つとして発刊されたものである。

これまで、日本の歴代名医の肖像を集めた書に

は藤浪剛一(日本医史学会第4代理事長)の『医家先哲肖像集』(昭和11年・刀江書院)があり、同書には165点の画像が収録されている。従来唯一のまとまった日本医家の肖像集で、医家肖像を引用する上で長く重用されてきた。